

## サッカーにおけるチームづくりとゲームパフォーマンスに関する研究

井上尚武<sup>1)</sup>, 杉山豊人<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 鹿屋体育大学

<sup>2)</sup> 株式会社ネット

キーワード: サッカー, チームづくり, ゲームパフォーマンス

### 【要 旨】

大学サッカートップレベルのチームについて1年間のトレーニング内容とゲームパフォーマンスについて分析・検討した。12ヶ月という長期のトレーニングプランを設定し、チームコンセプトに合わせて個人技術、個人戦術、グループ戦術、チーム戦術の構築を図ったが、前期の試合期後半にピークパフォーマンスを迎え、トーナメント優勝を果たすことが出来た。しかし後期試合期では、負傷による長期離脱者が増え、ゲームプランが崩れ戦術の修正を幾度も行ったが、優勝するには至らなかった。このことは長期のリーグ戦を優位に戦い優勝するには選手層を厚くし、チーム全員への戦術の徹底化と怪我の予防、食事、睡眠時間の確保などのケアも合わせて行う必要があることが示唆された。

スポーツパフォーマンス研究, 1, 162-168, 2009年, 受付日:2008年11月28日, 受理日:2009年3月11日  
責任著者:井上尚武 〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1 鹿屋体育大学 n-inoue@nifs-k.ac.jp

-----

### **Study on team building and game performance in soccer.**

Naotake Inoue<sup>1)</sup>, Toyohito Sugiyama<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> National Institute of Fitness and Sports in Kanoya,

<sup>2)</sup> KK Net

Key Words: soccer, team building, game performance

The present study analyzed and examined the content of training and the game performance of a top-level university soccer team for 1 year. The team made a 12-month long-term training plan, and tried to build individual skills, individual and group tactics, and team tactics, according to the team concept. The team's peak performance was in the second half of the first stage of the tournament, in

which the team won. However, in the second stage, the number of players who were on the disabled list for a long time increased, and the game plan collapsed. Although the tactics were modified many times, the team failed to win. This suggests that necessary actions include having more redundancy among players, ensuring whole team tactics, preventing injury, and ensuring sufficient meal and sleeping time in order to dominate the action and win the league games over the long term.

## I. 研究の動機・目的

チームスポーツにおいてチームづくりは重要な要素である。しかし、先行研究において、他競技のチームづくりに関するもの(水上ほか,1999)はいくつか行われているが、サッカーの具体的なチームづくりについての研究はシークレットな部門であり見当たらなかった。よって、サッカーのチームづくりに関する研究を行うことは重要であると考えた。

福井・瀧井(1989)の研究において、トップレベルにある高校の指導者は、特に、戦術に関して指導の観点を持っていることが示唆されている。

そこで本研究は、戦術面におけるチームづくりに着目し、大学サッカーチームを対象として、1シーズン(1回戦総当りから 2005 年より2回戦総当りへ改正)の取り組みとゲーム分析を合わせて、シーズンのゲームパフォーマンスがどのように変化していったのかを調査・検討することによって、チームづくりを行なっていく上での有効な資料を得ることを目的とした。

## II. 研究の方法

### 1. 研究対象・対象期間

- ・九州大学サッカーリーグ・1部(10チーム)リーグに所属するK大学サッカー部。
- ・2005年1月から2005年度のシーズンが終了する12月までの12ヶ月間。

### 2. 研究項目

(1) シーズンの戦術面におけるチームづくり(以下の2つについて調査を行なった)

- 1) チームコンセプト
- 2) 戦術面における取り組み、トレーニング

トレーニング周期ごとに行なった戦術面における取り組み、トレーニング目標・内容について調査した。

(2) ゲーム分析によってシーズンのゲームパフォーマンスの変化を明らかにする。

本研究ではゲームパフォーマンスを評価するための方法としてゲーム分析を行なった。

ゲーム分析については、対戦相手が同じである九州大学サッカーリーグの前期と後期を比較して考察を行った。

### 3. 分析方法

(1) 対象試合

- ・九州大学サッカーリーグ前期:9試合
- ・九州大学サッカーリーグ後期:9試合

対象となる試合のVTRを順次再生し、データを収集した。統計処理には、SPSSを用い、 $\chi^2$ 検定を行なった。

(2) 考察方法

研究項目(1)、(2)を合わせて考察を行なう。各トレーニング期におけるトレーニングの傾向とゲームの分析結果を照らし合わせて、各トレーニング期での成果と課題について検討を行なった。

### Ⅲ. 結果及び考察

#### 1. 1シーズンの戦術面におけるチームづくり

##### (1) チームコンセプト

- ① ボールを奪う、ゴールを奪う、ゴールを守る
- ② 攻守の切り替え(transition)
- ③ プレーの連続性
- ④ ミスを連続させない
- ⑤ 無謀なファールをしない
- ⑥ コーチング
- ⑦ 3ゾーンでのプレー

##### 1) 守備のコンセプト: 前線でボールを奪う

- ① 前線のコース限定。縦を切る・縦パスを狙う。
- ② プレスバック
- ③ ワンツリーの対応
- ④ クロスの対応

##### 2) 攻撃のコンセプト: 手間をかけずに攻める

- ① 早い攻撃(ダイレクトプレー)
- ② サイドチェンジと人を追い越す動き(2列目)
- ③ ワンタッチプレー
- ④ クロスボールのスピード及びコース、入り方・タイミング
- ⑤ ミドルシュート、ロングシュート

3) 戦術面における取り組み、トレーニング表1のように、各大会に向けてトレーニング周期を分け、トレーニングを行なった。

表1 期分け・大会日程

期分け	大会日程
準備期(1月11日～2月中旬)	
試合準備期(2月中旬～4月初め)	
試合期・前期-① (4月～5月末)	九州リーグ前期
試合期・前期-② 6月	九州大学トーナメント、全日本大学トーナメント
移行期・試合準備期 (7月～8月下旬)	
試合期・後期 (8月下旬～12月・1月)	天皇杯県予選・本大会、九州リーグ後期、全日本インカレ(1月:準決勝・決勝)

各期の重点内容は以下の通りであった。

- ① 準備期(1月11日～2月中旬)
  - ・体力の向上(ローパワーの立ち上げ)
  - ・パス技術の強化
- ② 試合準備期・前期(2月中旬～4月初め)
  - ・体力の向上(ミドルパワーの養成)
  - ・守備組織の強化
  - ・ダイレクトプレーの向上
- ③ 試合期・前期(4月初め～7月)
  - ・体力の向上(ハイパワー、専門的体力)と維持
  - ・試合期・前期一①(4月初め～5月末まで)
  - ・組織的な守備の理解と統一
  - ・遅攻戦術の向上
  - ・試合期・前期一②(6月)
  - ・攻守両面の習熟
- ④ 試合準備期・後期(7月～8月下旬)
  - ・シュート技術の向上
  - ・守備の見直し
  - ・攻撃の強化(チームプレーの構築)
- ⑤ 試合期・後期(8月下旬～11月下旬)
  - ・遅攻戦術の強化(ポゼッションでの崩し)
  - ・速攻戦術の強化(ダイレクトプレーの意識づけ)

○ ミーティングについて

目標の明確化、課題の抽出・修正を行う為に試合前と試合後にミーティングが行われた。試合前はチームコンセプトを踏まえ、対戦相手の長所と短所を把握し、チームとしての戦い方の確認を中心に行はれた。試合後は試合のビデオをチームで観て、今後の課題について分析・検証が行われた。

○ 大会成績(表2参照)

- ・リーグ前期:4勝2分3敗 総得点8、総失点4(10チーム中4位)
- ・リーグ後期:4勝1分4敗 総得点13、総失点12(通算6位)
- ・九州大学トーナメント:優勝(全国大会1回戦 対早稲田大学 0対3,ベスト16位)
- ・天皇杯全国大会出場:初戦敗退

表2 2005年度シーズンにおける成績

大会名		対戦相手	結果
九州大学リーグ前期 4勝2敗3分	第1節	九州産業大学	○2-0
	第2節	第一経済大学	○1-0
	第3節	日本文理大学	△0-0
	第4節	福岡教育大学	●0-1
	第5節	福岡大学	●0-1
	第6節	佐賀大学	○2-0
	第7節	熊本学園大学	○1-0
	第8節	宮崎産業経営大学	△1-1
	第9節	九州共立大学	△1-1
九州大学リーグ後期 4勝4敗1分 6位 8勝6敗4分	第1節	佐賀大学	○3-0
	第2節	熊本学園大学	○1-0
	第3節	宮崎産業経営大学	○2-0
	第4節	日本文理大学	△1-1
	第5節	第一経済大学	●0-1
	第6節	九州共立大学	●1-2
	第7節	九州産業大学	○4-2
	第8節	福岡教育大学	●1-3
	第9節	福岡大学	●0-3
九州大学トーナメント 優勝	1回戦	鹿児島大学	○4-1
	2回戦	第一経済大学	○3-1
	準決勝	福岡教育大学	○3-0
	決勝	西南学院大学	○4-3
全日本大学サッカートーナメント	1回戦	早稲田大学	●0-3
天皇杯鹿児島予選 優勝	1回戦	神村学園高等部	○10-0
	準決勝	JR九州スワローズ	○7-0
	決勝	ヴォルカ鹿児島	○5-1
天皇杯全日本サッカー選手権大会	1回戦	SC鳥取	●0-1

## 2. ゲーム分析によるゲームパフォーマンス評価 (図1参照)

### (1) 九州リーグ前期

守備については、M2地域において後期と比べ、有意な差があった( $P < 0.05$ )ことから、意図した通りに相手とボールを追い込むことができ、そこでボールを奪うという守備が安定してできていたと考えられる。

攻撃については、A2からシュートにつなげた割合が高く、リーグ後期との比較において有意な差が認められた。逆に、D1+D2 からシュートにつなげた割合が他地域に比べて低かった。この結果から、自陣深くから組み立てて攻撃を行うことができていなかったと考えられ、攻撃の構築がなされていなかったと考えられた。

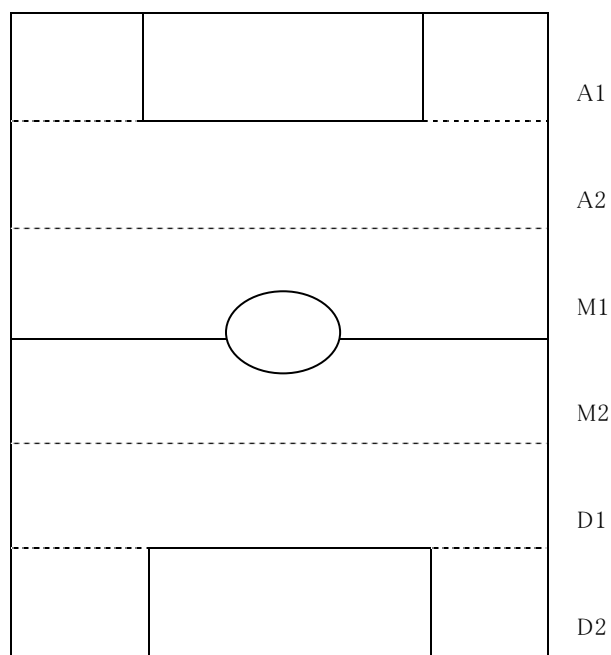


図1

(2) 九州リーグ後期(リーグ前期と比較して)

D2 でのボール奪取割合が前期と比べて有意に高い値を示した( $P < 0.05$ )。この結果から、前期のような組織的な守備が出来ていなかったために、ボール奪取地域が自陣近くになっていたと考えられる。これは守備陣を崩されて攻め込まれるケースが増え、二次攻撃を受けることも多くなり、被シュート数及び失点が増えてしまったと考えられた。

攻撃に関しては、D1+D2 からシュートにつなげた割合において、前期より有意に高い値を示した( $P < 0.05$ )。この結果から、自陣からでもシュートに持ち込むことができる傾向にあったので、シンプルな速い攻撃(ダイレクトプレー)や少ないボールタッチ数を意識したポゼッションプレーもできていたのではないかと考えられた。

(3) 取り組み調査、ゲーム分析を行って

シーズン前半(試合準備期、試合期・後期)は、守備中心のチームづくりを行い、その成果が現れていた。九州大学リーグの前期が開幕した試合期・後期には、引き続き組織的な守備の強化が行われながら、攻撃面におけるトレーニングが増やされていった。その結果、安定した守備で前期リーグを戦うことが出来、九州大学トーナメントでは見事優勝を果たした。しかし、攻撃に関しては課題が残った(前期9試合:得点8、失点4)

シーズン後半(試合準備期・後期、試合期・後期)は、まずトレーニングの見直しが行われた。そのなかで、決定力不足という課題のもと、シュート練習が重点的に行われ、成果があった(On Target 率:前期 36.8%→後期 51.4%)。試合期・後期ではゲーム分析の結果から、守備において前期のような組織的な守備ができていなかったと考えられた。原因として、チームの中で怪我人や累

積により守備のメンバーが固定できず、ボールを奪う場所がチームとして共通理解されておらず組織的な守備ができにくかったと考えられる。攻撃については、ボールを奪って時間をかけずに相手ゴールへ向かう攻撃をテーマにしたトレーニングを行ない、前期と比べ改善された。(後期:得点13、失点12)

K大学は20回目を迎えたリーグ戦で9回優勝しているが、今年度より年間前期・後期、計18試合のリーグ戦に変更された為、年間を戦うための周到な準備が遅れ選手層の薄さもあり、不本意な結果に終わった。次年度への課題として 1.レベルの拮抗した戦える人材の確保と育成、2.年間を戦い抜ける体力の養成、3.各ポジションのスペシャリストの育成、4.フェアプレーの徹底 5.攻撃・守備のチームのオリジナルの構築、6.セットプレーのスペシャリストの育成、7.怪我等による長期離脱者の防止のための予防と、選手自身の体に対するメンテナンスの意識の高揚策などがあげられる。

#### IV. 引用・参考文献

- ・福井 哲・瀧井敏郎(1989)サッカーにおけるチームづくり—システムの思考—。
- ・東京学芸大学紀要 第5部門芸術・体育. 38:181-188.
- ・井上尚武・渡邊健・塩川勝行・平田文夫・清水信行・金高宏文(1996) 1994 ワールドカップサッカーにおける攻撃戦術の検討 —選手のパフォーマンスとボールの移動軌跡との関係から—。鹿屋体育大学学術研究紀要. 15:71-84.
- ・町田誠祐(2001)チームアナリストとしての新たな取り組みに関する事例的研究—鹿屋体育大学体育会サッカー部の場合—。鹿屋体育大学卒業論文。
- ・水上一・川村レイ子・大西武三(1999)大学女子ハンドボールチームでの年間を通してのチームづくりに関する研究。スポーツ運動学研究. 12:59-78.
- ・西川 勤・山中邦夫(1999)フランスW杯アジア最終予選における日本代表チームの監督交代前後のチームパフォーマンスについて。サッカー医・科学研究. 19:18-21.
- ・Sports graphic Number PLUS(2005)2005・2006 UEFA Champions League
- ・The Winning Tactics. 文藝春秋 October.
- ・(財)日本サッカー協会技術委員会(2002)2002 FIFA World Cup Korea/Japan
- ・JFA テクニカルレポート。(財)日本サッカー協会。
- ・(財)日本サッカー協会技術委員会(2003) 第3回フットボールカンファレンス報告書。(財)日本サッカー協会。
- ・(財)日本サッカー協会技術委員会(2003) FIFA Confederation Cup FRA NCE 2003 JFA Technical Report。(財)日本サッカー協会。